



「鼓童ワン・アース・ツアーエターニティ」によせて

鼓童、そして和太鼓の原点こそが『永遠』

文:今井浩一、写真:岡本隆史

佐

渡に初めて渡ったとき、その日最後の輝きを放ちながら、水平線の向こうに沈んでいく太陽がなんとも感動的だった。佐渡汽船の新たな高速カーフエリーがこの秋に「あかね」と名づけられたばかりだけれど、まさにそれがあの日の夕陽の色だった。そして合わせて佐渡で大切に育てられている天然記念物のトキの色にも重ねたネーミングなのだそう。そんな佐渡の夕陽は、島の豊かな自然を象徴している気がして、それがなぜなのかはわからないけれど、他所で見る夕陽に比べて格段に劇的だった。

鼓童の稽古場で、新作『鼓童ワン・アース・ツアーエターニティ』初の通し稽古を見ていて、実はそんなことを思い出していた。まるで秋祭りを彷彿とさせるような懐かしくて、温かな音色、オーピーニングからほどなくステージ後方に浮かび傾いていく太陽が、すぐさま佐渡のイメージを喚起させてくれたのだ。

それにしても『永遠』とはまた、過ぎるほどに壮大で、深遠なタイトルだ。

そのことについては、坂東玉三郎芸術監督はこうしたためている。

「永遠」というテーマについて自分なりに思いを巡らせていたある日、ふと「自然の営み」が螺旋状に続いて行く、という考えに行き着いたのです。「自然の営み」を羅列することで「永遠」を表現出来たら。厳密に言えば「永遠」というものは無いのかも知れませんが、それに繋がるきっかけとして

夜明け 光 雨 風 雲 波 星々 夕暮れ

その中の「人間」というものが思い浮かび上がつてきました。」

全員で試行錯誤する稽古場は 心、音、そして笑顔の交歓に満ちあふれていた

自然の営みは、人智ではどうにもならない圧倒的な力もある。そんなさざまな小さな芽にも宿る生命の神秘のような力もある。そんなさざまで、和太鼓の音色のあらゆる表情でつづっていくのが『永遠』、で

はないだろうか。

これから始まるドラマを映し出すスクリーンが闇に広がつていくような曲「夜霧」(前田剛史作曲)が始まつた。おりん(※1)の高音が、島を吹き抜ける涼やかな風のように響きわたる。そして横笛を軸にいろんな新たに取り入れたものも含めた「打つ」楽器がベースのリズムを刻むメロディーは、前述した秋祭りの祭り囃子のよう。日本人の中に古くから伝わるなりわい、繰り返し繰り返し行われきた営み。そんなものに対する郷愁をかき立てる。同時に波の音、風の音が加わり、佐渡の自然の豊かさを、海であつたり山であつたりの恵みへの感謝を思わせる。(※1 正式名称は「ここちおんず」という仮題)

『永遠』の1部は、冒頭とエンディングが、こうした世界観で包み込まれている。和太鼓の爽快感を期待する観客をするりと交わし、はぐらかしていくすぐり、やがて燃え上がるさせる。

桶胴のソロから続く「カタライ」(前田剛史作曲)では、一人の奏者の周りを大小いろいろな大きさ、いろんな形の和太鼓がぐるりと囲み、そのまま外側を4人の奏者が囲むというユニークなポジションで演奏が繰り広げられていく。それはまさにフリージャズのセッションのようだ。「この曲は玉三郎さんから太鼓で囲つてみたらいいんじゃない? 囲つた状態でつくつてみてほしいと言わせて作曲したものです。おしゃべり、会話するというテーマがあつて、太鼓によつてさまざまな拍子、それぞれに違う言葉(音)を持つてているのですが、その個性がうまく混じり合つて一連の曲になつていけばいいなあと。生きているうえでの、コミュニケーションとしての会話、人間の根源的な営みを描いているんです。玉三郎さんは太鼓を和音的な楽器として捉えていらっしゃるというか。音の高低が混じり合つたときのメロディー、複雑な中にも大きな波があるとか、そういうものを求められている気がします」



りをする芸術監督がいる。すべてを瞬時にチョイスしていく姿は、太鼓の演奏はしなくとも、直感的に魅力的な要素がわかつてしまふかのごとく。「カタライ」の返し稽古でも「いつそ、こうしてみたら」とメンバーのアイデアを大胆に膨らませていく。次！次！次！と叩く太鼓を指で素早く指示していく。奏者もそれを右へ左へ身体を切り返して負けじと叩き続ける。芸術監督のアドバイスによって、若い奏者たちが、動きが、音がより自由に、大胆になつていく。一息ついて芸術監督とメンバーたちが笑顔の交歓している稽古場は、皆がハジけている。そして先ほどのフリージャズは、奏者同士の濃密なやりとりへと変貌していくのだ。

芸術監督のさまざまなおーダーから改めて太鼓の魅力に気づくことができた

この通し稽古が行われたのは9月の中旬のこと。8月21日から23日に行われたアース・セレブレーションの喧噪が徐々に秋風に変わりかけていた。しかし鼓童村の稽古場では、この11月からツアーを開始する新作『鼓童ワン・アース・ツアーワン・永遠』の稽古が熱を帯びていた。世界を、国内をかけめぐっている鼓童とあって、数少ない全員が集まつてのリハーサルは集中度がものすごい。『永遠』に取りかかったのは今年1月のことだったそうだ。「今回はすべて新曲で行きましょう!」の芸術監督の一言から始まった。これまでの作品は、鼓童の代表的な曲を核にアレンジしたり、形を変容させながらつくられることが多かつたが、『永遠』はすべてがまっさらな状態からのスタートだ。

芸術監督から渡された『永遠』について(冒頭の)短い文章をもとに、イメージなどを一緒に話して話し合い、共有した。「それをもとにアイデア出し、発表をする機会を何回か持ちました。その内容は曲であつてもいいし、太鼓を叩く形でも太鼓の配置でもなんでもいいんです。それを玉三郎さんがご覧になつて、その中から得た着想をもとに新作が練られていました。この曲のこの部

分を膨らませたい、この形を使ってみたいというものを核に徐々に作品ができていく感じです」(船橋裕一郎)。その後は芸術監督がチョイスした「種」をメンバーそれぞれが育てていく作業がずっと続けられ、その全貌が姿を表したのが9月上旬だつた。

『永遠』は、坂東玉三郎が芸術監督となつて演出を手がける第3作目。第1作目の『伝説』は、鼓童の伝説的演目と芸術監督が手掛けた新作曲をつないだ作品だつた。第2作目の『神秘』は、闇と光の交差する幻想的な空間で、演劇的な要素、役者としての立ち方を追求したものに。芸術監督が求める表現、それは鼓童にとつての新たな挑戦というべきものだつた。「以前の鼓童というのは、歯を食いしばつて、汗を飛び散らせながらデカい音を出してなんぼみたいなところが少なからずあつた。玉三郎さんには逆に引き算を要められて、しばらくは小さい音、纖細な音をひたすら練習しましたね。そのことで一つの太鼓がどういう音色を持つているのかを改めて知る機会になりました。だから作曲するときでも、そろやつて発見した音を散りばめられるようになります」(前田剛史)。「自分たちで演出をしているときには、新しいことをやるうとしても、昔からの鼓童の伝統にしばられた部分が意外と大きいんだなと気がつきました。半纏、鉢巻きや褲が脱げなくて、脱げないがゆえに踏み出せなかつた。確かに最初は衣裳を脱ぐことにさえ抵抗がありましたが、脱いでみたら気持ちも変わつて、新しいことにチャレンジすることが面白くなつてきました。玉三郎さんは思ひもかけないことをおっしゃるんですけど(笑)、それが今では意外としつくりくることもある」(坂本雅幸)。「今まで鼓童は、和太鼓と日本の民俗芸能をベースにしていたので、洋楽的なリズムをやること、ダンスのような身体のさばきには違和感があつたんです。玉三郎さんが新しいことを積極的にやらせようとしていて、戸惑いながらも自分たちの受け幅が広くなつてきて、今度はこれ、今度はこれとわかるようになつてきたんです」(石塚充)。

二〇一二年の正式就任以前から続く芸術監督との十年におよぶ交流を通して、その思いはメンバーの中で消化、浸透してきたからこそ、『永遠』では、皆がフラットな状態からスタートできたのだ。

和太鼓とは何か？ そんな問い合わせから生まれる新たな魅力

『永遠』の第一部もおりん(※2)の音から始まる。どうやらこの音は、観客が日常から離れるためのおまじないのようなものかもしれない。小さなシンバルのようなチャッパと鈴(すず)などの鳴りもののアンサンブルから始まる。そこから4人が抜け出し、コンテンポラリーでりながら土着性も感じさせるダンスを繰り広げる。チャッパやガムランの鳴り響く不思議なメロディーに併せてのダンスが異空間へと観客を誘う。(※2 正式には久乗おりん)

異空間で最初に出会うのは「焚火」(小田洋介作曲)。まるで和太鼓の概念をくつがえしていくようなユーモアにあふれた演奏だ。5人の奏者が和太鼓の縁を円を描くようにツーっとなぞる、コンコンと叩く。和太鼓というもののすべてを使って、明らかに和太鼓とは違った音とリズムを生み出していく。誤解を恐れずに言えば、目を閉じて聞いていたら、デッキブラシやドラム缶などを使ったパフォーマンス、『ストンプ』の世界に入り込んでいくようだった。それが和太鼓が奏でているものとは思えなかつたのだ。鼓童の影響を受けて『ストンプ』が誕生したのはよく知られていることであるけれど、その世界観の原点であり、太鼓の奥深い可能性を見せられた気がした。

「永遠というテーマを考える中で、僕にとつてははるか昔にさかのぼる必要性があつたんです。永遠は未来だけではなく過去にもあるわけじゃないですか。だったら和太鼓の基本的な演奏方法が確立される前の段階、和太鼓になる前の生まれた瞬間を想像してみたとき、曲をつくるうえで、従来の和太鼓の音のつ

くり方を外してみようと思ったんです。もしかしたらあんなの和太鼓じやないとおっしゃる方もいらっしゃるかもしれませんけど、本当の原始の時代はどんなふうにやっていたかなんて誰もわからないじゃないですか。“従来の”という考え方 자체が基本ができる上がつてからのことですから”。小田がこの発想にたどり着いたのも、『伝説』『神秘』という作品を経て、芸術監督が目指しているものが何であるかがわかつてきただと言う。これは芸術監督が歌舞伎というものを伝統芸能ではなく現代と呼吸する表現に昇華させている姿勢に通じるものではないだろうか。鼓童の中心メンバーである小田が突出してこうした自由な発想を生み出すことは、ほかのメンバーへの影響も大きいはず。

やがて、笛の音とともに、ふさのついた長いバチを振りかぶつての踊りが始まっていく。円を描きながら回つていくうちに、それは平胴大太鼓を叩く動きに変わっていく。平胴大太鼓が1台から3台へ、叩き手も1人から数人へ。こうしたフォーメーションをはじめ、間、しなやかな動き、緩急などは芸術監督自身が大切にしているものであり、それらが皆に浸透しているのを感じさせる。「永遠というテーマを聞かされたとき、何かが回つていてるイメージが浮かんだんです。とにかく回りたいと考えて、最初はバチを回して、身体を回して、太鼓の周りを回つてみたら、このまま太鼓を増やしてたらと玉三郎さんがおっしゃって。回っているうちに同じところだけではなく、高まつていく感じを出せたり、太鼓を叩くだけではない空氣の動きを出せたらいいなど」(石塚)。稽古場に太陽系のような関係性、引力が生まれていた。

そこからはおなじみの力強い和太鼓の世界。迫力あるリズムが疾走していく。鼓童のメンバーが、和太鼓と一緒に化しているようでもあり、壮絶に格闘するかのようでもある。気がつくと小田をはじめ3人の奏者が掌で太鼓に向かっている。それこそ、原始そりうであつたかのような姿からは、太鼓と闘いを通して対話をしているようでもある。これだけいろんな表情を見せた和太鼓がラス



トスパートに向かっていく。無骨に打ち続ける刹那がより際立つていく。最後の一打ちまで。

積み重ねてきたものの大切さを知る 鼓童版「温故知新」



今井浩一 Koichi Imai

日本大学芸術学部美術学科絵画科卒業。
大学時代に演劇に出会い、演劇にハマる。
演劇情報誌シーターガイドにて16年を過ごし、編集長、スーパーバイザーなどを経て、まつもと市民芸術館広報に。5年半勤めた後、フリーの編集・ライターに。信州を拠点に演劇をはじめ、アーティスト・クラフト作家、農家などを取材。最近はイベントの企画なども行っている。

和太鼓の魅力、和太鼓を超えた新しい魅力を鼓童のメンバー自身が発見し、それをまた観客自身が発見していく。それが『永遠』。改めて和太鼓という“もの”に無垢に向き合った。和太鼓とは何かを改めて考え、和太鼓を知り、そして当たり前だったことを投げ打つてさらに新たな可能性を広げていった。そして『永遠』では、鼓童の作品を締めくくつてきた象徴たる大太鼓も登場するシンがなくなりた。でも違和感はあるでない。その代わりさまざま和太鼓がいろいろな表情で魅せる。それが和太鼓とは思えないような音までも奏てる。だからこそ、力尽きるまで叩き続ける姿がより際立ち、感動を引き起こすのではないだろうか。そして同時に、三十年以上積み重ねてきた歴史、方法論、経験、環境などなどが改めて素晴らしいものであることを実感している。新たなチャレンジの意義は、そこにもあつた！

「玉三郎さんがいらしてからは、なんと言われようとも今までやつてこなかつたことにチャレンジをしてきた。もしかしたら、何が新しい、何が古いとかではなくて、どんなことをやつても鼓童の舞台だねつて言われるようになりたいです。伝統曲も、コンテンポラリーダンスも同じ土俵で語られる武器にしていきたい」

（坂本）。「民俗芸能、和テイストのものには自分たちはすぐ行けるんです。この際、やれることはすべてやってしまうのがいいんじゃないかと思いますね。どんどん可能性を広げて、あとは自分たちで選べばいい」（前田）。

最後は小田の言葉で締めたいと思う。「玉三郎さんが目指して

いるものが、うつすらですが見えてきました。将来どういうふうな太鼓打ち、芸能者になつてほしいかという思いが見えてきました

たね。求められているものが普通じゃない。より高度なものなんですね。これまで積み上げたものを置いていくこと。今まで積み上げたもの上で今があるわけですが、同時に手放していく作業もしていかないといけない。たとえば自己表現への欲求を置いてきた先に、自分が見えてくるように。」（小田）。

だからこそ、鼓童にはこの言葉を贈りたいと思う。
鼓童は変わらない、しかし鼓童は変わり続ける。それこそが、『永遠』の姿のかもしれない。



鼓童ワン・アース・ツアード・2014

芸術監督・坂東玉三郎演出の「鼓童ワン・アース・ツアード・2014」、3作目となる本作は「永遠」をテーマに、森羅万象の移ろいとその中にいる人間の姿を、魂ゆさぶる太鼓の色彩豊かな新曲の数々でお届けする舞台です。

●2014年11月日本初演

●2015年6月～7月、9月～11月日本公演



鼓童の活動に関する最新情報は公式サイトで <http://www.kodo.or.jp/>

鼓童メルマガ登録

配信を希望されるメールアドレス [携帯・スマートフォン・PC] から、"kodojp@m.blayn.jp" にて、タイトルと本文を記入しない空メールをお送りください（登録・配信料無料）。

※ドメイン名@kodo.or.jpからのメールを受信できるように設定してください。

Facebook

<https://www.facebook.com/KodoHeartbeatJp>

Twitter

@KodoHeartbeat

<https://twitter.com/KodoHeartbeat>

鼓童 Kodo

〒952-0611新潟県佐渡市小木金田新田148-1 鼓童村

Tel. 0259-86-3630 Fax. 0259-86-3631

Email: heartbeat@kodo.or.jp